

源氏物語における助動詞「ぬ」の文末用法： 場面起こしと場面閉じをめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学国語国文学研究室 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西田, 隆政 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20171225-104

Title	源氏物語における助動詞「ぬ」の文末用法：場面起こしと場面閉じをめぐって
Author	西田, 隆政
Citation	文学史研究. 40 巻, p.41-52.
Issue Date	1999-12
ISSN	0389-9772
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学国語国文学研究室
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

源氏物語における助動詞「ぬ」の文末用法

—— 場面起こしと場面閉じをめぐって ——

西 田 隆 政

はじめに

源氏物語における助動詞「ぬ」の機能について、文末用法を対象として検討する。古代語の助動詞「ぬ」の意味・機能については、数多くの研究が積み重ねられているが、この小稿では、源氏物語というテキストの中で「ぬ」がどのように用いられているのか、という観点で、助動詞自体の意味・機能だけにとどまらない、テキストという文脈上の働きを考えていくことにしたい。

勿論、「ぬ」の意味の基本は、述語動詞のアスペクトの意味を担うものであるが、物語の語りの中ではそれだけでは割り切れないものも存すると考えられる。今回は、テキストの語りを構成する地の文末の助動詞「ぬ」を中心に検討を行うこととする。

なお、助動詞「つ」については、地の文末の使用例が一〇七例と少なく、今回は検討の対象から除外している。

一 文末用法の使用傾向

源氏物語の助動詞「ぬ」の使用数は三二四六例である(1)。さらに、その中で文末用法の例について、次頁に表にして示した。この中には、命令形「ねよ」を含んでいない。また、「にけり」「ぬらむ」「ぬかし」など、助動詞や助詞がさらに下接する例も含まない。「ぬ」単独での文末用法の例を調査している。表には、終止形による終止の例、係り結び等の連体形終止の例、「こそ」の係り結びによる已然形の例の三つの形式を示している。

その結果として、かなり特徴のある傾向が見出される。まず、文末用法自体の比率が三二四六例中の六五三例と全体の二〇・一％でそれほど高いものではないことである。他の助動詞とともに用いられる例や連体修飾用法の例の数が多くことによると考えられる。

文体毎の使用比率においては、地の文が六五三例中五三三例と八一・六％を占めて、少なくとも文末用法では地の文での使用が目立っている。「ぬ」の場合、後で触れる物語の場面と密接に関わった使用例があり、それもこのような傾向を示す一因と考えられる。

また、地の文とそれ以外とは、大きく係り結びの出現傾向が異なっている。地の文においては、係り結びで終止することは少数例

	ぬ	ぬる	ぬれ	計
地の文	522	11	0	533
会話文	46	37	6	89
心話文	10	3	1	14
消息文	2	3	0	5
和歌	7	5	0	12
計	587	59	7	653

に限られている。五三三例中の一一例と二・一％に過ぎない。それに対して、会話文では八九例中の四三例で四八・三％と半数近くを占めている。韻文である和歌においても使用例がかなりあることからすると、「ぬ」自体が係助詞の結びとなりにくいのではなく、地の文という文体的な側面が注意されることになる(三)。

以上のような使用傾向であるが、助動詞「ぬ」の文末用法を考えるにあたっては、まず地の文を検討すべきであろう。使用例が圧倒的に多いこと、また後に触れる注目すべきいくつかの使用例もあり、これも「ぬ」の意味に密接に関わると考えられるからである。

二 助動詞「ぬ」の場面閉じ

助動詞「ぬ」の用法として、場面を閉じる機能の存在が、鈴木泰氏により提起されている(三)。

このように、一つの動作過程の終結ということに、場面の終結やそれまで続いていた状況の変化が託されるのは、ゞツ形が、動作の終結だけでなく、状態の終結をも表すことを通じて、一般的に場面持続の終結機能をもつようになったのではないかと考えられる。ゞツ形についても、移動動詞において移動主体の消失に場面の終結が託されるということが多かったことから想

像されることがだが、他の意味動詞のゞツ形が場面の終結を表すことがある。ただし、それは、移動動詞の場合ほど多くはないので、ゞツ形の場面を閉じる機能は、移動動詞に特徴的なものと考えなくてはならないかもしれない。(四)

引用した部分で、鈴木氏は「つ」「ぬ」の場面終結の機能について述べているのであるが、「つ」に比較すると「ぬ」の場合は場面を閉じる例が少なく、移動動詞がその中心ではないかと指摘している。ただ、以前、源氏物語のいくつかの巻で助動詞「ぬ」の機能を分析した際には、移動動詞だけでなく、思考や心情を示す動詞や動作を示す動詞に「ぬ」が下接した例にも、場面閉じの機能を示す例があった。ここでは須磨の巻を例に検討する(五)。

〔資料一〕今ひとたびの対面なくてやとおぼすは、なほくちをしけれど、おぼし返して、憂しとおぼしなすゆかり多くて、おぼろけならず忍びたまへば、いとあながちにも聞こえたまはずなりぬ。明日とての暮には、院の御簾拝みたてまつりたまふとて、北山へまうでたまふ。(須磨「四〇七頁」)

〔資料二〕おぼし嘆くさまなど、いみじう言ひたり。あはれと思ひきこえたまふ節々もあれば、うち泣かれたまひぬ。姫君の御文は、心ことにこまかなりし御返りなれば、あはれなること多くて……(須磨「四一七頁」)

〔資料三〕君もいささか寝入りたまへれば、そのさまとも見えぬ人来て、「など宮より召しあるには参りたまはぬ」とて、たどりありくと見るに、おどろきて、さは、海のなかの竜王の、いといったものめでするものにて、見入れたるなりけりとおぼす

に、いともものむつかしう、この住ひ堪へがたくおぼしなりぬ。

〔須磨〕四三六頁

資料一から三まで、須磨の巻の例を挙げた。資料一では、臘月夜の尚侍と手紙を贈答して、光源氏は無理してまでも会おうとは言わないようになった、のように状態変化を示す動詞の例である。それについて、桐壺院の墓に参拝する場面に移り変わっている。

資料二は、須磨に移ってから臘月夜と贈答して、彼女を「あはれ」ということもあって、自ずと泣かれてしまうという例である。「泣く」という動作動詞に「ぬ」下接した例で、その後は紫上からの手紙を読む場面となる。

資料三は、須磨の巻末である。海浜で御禊をした際に暴風雨が起こり、夢の中で竜王らしきものに目をつけられたのに気味が悪くなり、須磨の住居に耐えられない気持ちを持つようになったと、思考を示す動詞の例である。この場合は、単に場面を終えるだけでなく、巻自体を終結させている例である。

勿論、須磨の巻にも、移動動詞で場面閉じを示す例もいくつか見られる。次の資料四・五である。

〔資料四〕親王は、あはれなる御物語聞こえたまひて、暮るるほどに帰りたまひぬ。花散里の心細けにおぼして、常に聞こえたまふもことばりにて……〔須磨〕四〇四頁

〔資料五〕「ゆきめぐりつひにすむべき月かげのしばし曇らむ空ながめそ／思へば、はかなしや。ただ、知らぬ涙のみこそ、心をくらすものなれ」などのたまひて、明けぐれのほどに出でたまひぬ。よろづのことどもしたためさせたまふ。〔須磨〕

四〇五頁

資料四では、帥の宮が光源氏にひっそりと挨拶に来て帰っていった後に、光源氏が花散里を訪ねる場面となる。資料五は、その花散里の屋敷を、人目につかぬよう夜の明けきらないうちに出て、それから二条院で出発の前の準備で、身辺万端の整理をさせている場面になる。これらは、ともに人物が移動してしまつてその場面が終了し、次の場面が始まる例というものである。先に、鈴木氏が言われたのに合致する例である。

須磨の巻は、助動詞「ぬ」によって一文が統括されている文（以下「ぬ」の文と略称する）で、段落構成が行われていると考えられる。その中では、「ぬ」の文は一例、移動動詞が先の二例以外に、「出でたまひぬ」「乗りたまひぬ」「着きたまひぬ」「入りたまひぬ」の四例で六例、それ以外の動詞が先の三例以外に「おぼしなりぬ」「空もかきくれぬ」の二例で五例と、両者の差はなく、必ずしも移動動詞だけとは言えないようである。

また、逆に言えば、文脈によってどのような動詞に「ぬ」が下接する例でも、その可能性を保持していることになる。「ぬ」の場面閉じの機能は、登場人物の移動が完了する場合だけでなく、ある動作が完了した結果次の場面が招来される場合には、一般的に見られるものであろう。

そのような点に着目して、地の文末の五三三例を検討すると、その中の一九〇例と三五・六％には場面閉じの可能性があるようである。勿論、全く違う場面になる例だけでなく、同じ場面であってもより細かい状況説明や、登場人物の心情説明や述懐が行われるとい

うようなある程度の連続性を保持しているものもある。

とすると、高い比率を示している中で、どのような例が場面閉じにならないのであろうか。次の資料六と七である。

〔資料六〕いかにいかにと日々に責められ困じて、さるべきをりうかがひつけて、消息しおこしたり。喜びながら、いみじくやつれ忍びておはしぬ。まことにわが心にもいとけしからぬことなれば、気近く、なかなか思ひ乱るることもまさるべきことまでは、思ひもよらず……〔若菜下〕——一七六頁

〔資料七〕例ならぬことにて、御前近くもえ参らぬつまじさに、長押にもえのぼらず。なほ持て来や。所に従ひてこそ」ととて、召し寄せて見たまへば、ただこの枕上に夢に見えつる容貌したる女、面影に見えてふと消え失せぬ。昔物語などにこそかかることは聞けと、いとめづらかにむくつけけれど……〔夕顔〕——二四頁

資料六は移動動詞の例である。柏木が女房の小侍従を責めて、連絡を受けて喜び勇んで六条院にやって来て、自分自身の心にも不屈きなことと思うものの、女三の宮に近づいて却って心が乱れてしまうとは思ひもよらずと続いている。六条院に着いて、すぐに次の場面が始まるのではなく、柏木があれこれ考えあぐねている部分が「ぬ」の文の直後に続くのである。

資料七は「消え失す」の例で、某の院で光源氏が夕顔を死なせてしまう場面である。隨身を呼びつけて灯りを持って来させると、夢で見た女性がふつと消え失せるのが見えた。これを見て、昔物語にも聞いたおそろしいことと感じて、以下夕顔をどうするかで苦慮し

ている。女の姿が「消え失す」ことで新しい場面が始まるのではなく、某の院での話しが続いているのである。

このように、助動詞「ぬ」が場面を閉じている例の多い中でも、叙述の流れの中で必ずしもそうならない場合があるわけである。しかし、助動詞「ぬ」の文が、何らかの動作の完了を示すものである以上、常にその可能性を秘めていることになる。

とすると、助動詞「ぬ」には、語としてのアスペクト上の意味で動作の完了を示すだけでなく、テキスト上での意味としては、場面を閉じる機能を持つことになる。物語のテキストにおいては、助動詞「けり」に語りの機能があることは共通理解となっており、ところであるが、助動詞「ぬ」にもそれに準じる機能があるのではと思われるのである。

三 助動詞「ぬ」の場面起こし

鈴木氏は、場面閉じだけでなく、場面起こしの機能を持つ助動詞の使用例も指摘している。「つ」「ぬ」が場面閉じなのに対して、「たり」「り」に場面起こしの場合があるとされるのである。

地の文における移動動詞の「タリ・リ」形は、(A)の動作主体を物語の中に導入し、新たな場面を始発させるという場面切替上の役割をもつようになっていることが知られる。やや、例外もあるが、それは数も少ないので、これを「タリ・リ」形の場面形成上の機能とすることに問題はないであろう。(7)

引用部分では、移動動詞での分析結果が示されている。ここでは

「場面を始発」とされているが、二二二頁には「移動動詞に見られたようなリ・リ形の場面起こし機能」とあるので、以下場面起こしの用語で論を進める。

〔資料八〕……にはかにめぐらし仰せたまひて、見たまふ。日たけゆきて、儀式もわざとならぬさまに出でたまへり。暇もなう立ちわたりたるに、よそほしい引き続きで立ちわづらふ。

〔葵〕二二六頁

〔資料九〕……なほなほしきことどもを言ひかはしてなむ、心のべける。かの大將殿は、例の秋深くなりゆくころ、ならひにしことなれば、寝覚め寝覚めにも忘れせず、あはれにのみおぼえたまひければ、宇治の御堂造りはてつと聞きたまふに、みづからおはしましたり。〔東屋〕一八四〇頁

この二例は、鈴木氏が挙げた例で、いずれも動作主体がある場所に到着したことを示している。資料八では葵上一行、資料九では薫大將である。そして、「日たけゆきて」や「秋の深くなりゆくころ」とあることから、「前の場面が終結してしばらく間があつて新しい場面が始発する」とされている。

確かに、このような例が移動動詞に多く、一方「ぬ」の場合は場面閉じの用法がある。「たり」「り」とは対照的な用法の違いがあることになり、明快な分析結果が出ている。ただ、他の動詞の例も勘案すると「ぬ」の場合にも場面起こしとも言える例があると考えられるのである。

〔資料一〇〕……寄りゐたまへるを、几帳のそばより見れば、曙のやうやうものの色分かるるに、げにやつしたまへると見ゆ

る狩衣姿のいと濡れしめりたるほど、うたてこの世のほかの匂ひやと、あやしきまで薫り満ちたり。この老人はうち泣きぬ。

〔橋姫〕一五二七頁

〔資料一一〕かの院よりも、かくわづらひたまふよし聞こしめして、御とぶらひいとねむころにたびたびきこえたまふ。同じさまにて、二月も過ぎぬ。〔若菜下〕一一六九頁

〔資料一二〕よろづ右近ぞ、そらごとしならひける。月も立ちぬ。かうおぼし焦らるれど。おはしますことはいとわりなし。

〔浮舟〕一八八五頁

資料一〇は「泣く」に「ぬ」の下接した例である。薫の様子を見た弁の尼は薫りが満ちていることに驚き、彼に対面できたことに感激して泣いてしまい、これ以降に彼女の思い出話が続くことになる。はっきりした場面の転換とまではいかないが、状況を提示してから、いよいよ弁の尼が薫出生の秘密を語って、それがかなりの分量にもなる。弁の尼が感極まって泣いたことが、この出発点になっていることからして、「泣きぬ」以降、新しい場面起こしになっているとも思われるのである。

資料一一は、時節の経過を示す例である。紫上の急病で、各所からお見舞いが続いていたが、彼女の病状は全く回復せずと同じような状態で二月も過ぎたとある。これ以降、六条院から二条院に転地しようと光源氏に決断させることになる。紫上の病気で慌てふためく場面から、二月が経過して次の転地療養の場面になり、ここでは明らかに場面が移り変わり、場面起こしになっている。

資料一二も、資料一一と同じく、時節の経過を示す例で、句宮と

浮舟が違ったことを右近があれこれごまかすとあって、月も変わる。句宮は重々しい立場ゆえに簡単に宇治に行くことができないと続いている。この「月も立ちぬ」のような単文の形式で、時節の経過を示し、なおかつそれが次の場面起こしになっている例は、源氏物語中で一九例見られる。新しい場面を始めるための一つの形式と言えるものである。

- 〔資料一三〕夜も明けぬ。〔胡蝶〕七八四頁
〔資料一四〕月も入りぬ。〔桐壺〕一八頁
〔資料一五〕年もかはりぬ。〔明石〕四六八頁
〔資料一六〕年もかはりぬ。〔薄雲〕六一〇頁
〔資料一七〕年もかはりぬ。〔若菜上〕一〇二五頁
〔資料一八〕年かへりぬ。〔若菜上〕一〇八六頁
〔資料一九〕年も暮れぬ。〔末摘花〕二二四頁
〔資料二〇〕年も暮れぬ。〔若菜下〕一〇四三頁
〔資料二一〕月も立ちぬ。〔浮舟〕一八八五頁
〔資料二二〕鶏もなきぬ。〔帚木〕七一頁
〔資料二三〕秋にもなりぬ。〔夕顔〕一〇九頁
〔資料二四〕四月になりぬ。〔明石〕四五二頁
〔資料二五〕秋になりぬ。〔篝火〕八五五頁
〔資料二六〕九月にもなりぬ。〔藤袴〕九二八頁
〔資料二七〕霜月になりぬ。〔真木柱〕九三六頁
〔資料二八〕二月にもなりぬ。〔真木柱〕九六三頁
〔資料二九〕二十日あまりにもなりぬ。〔浮舟〕一九一八頁

動詞の五十音順で例を挙げたが、「明く」二例、「入る」二例、「か

はる」一例、「かへる」三例、「暮る」二例、「立つ」一例、「なる」七例である。資料二二の「鶏もなきぬ」は、結果的にこれらの例と同じく時の経過を示すのでここに入れてみる。

これらの例も、場面起こしの例と考えられるもので、ある程度の時間が経過して、その結果として次の場面が始まることになる。単文形式であることも、長文の多い源氏物語中ではある種の徴標となりやすいものと言えよう。

また、移動動詞にも場面起こしと見られる例がある。

〔資料三〇〕なほ、かかる歩きは軽々しく怪しかりけりと、いよいよおぼし惣りぬべし。小君、御車のしりにて、二条院におはしぬ。〔帚木〕九三頁

〔資料三一〕……いとはしき御気色もかたじけなくて、タツ方行く。かやすき人は、とく行き着きぬ。〔蜻蛉〕一九三三頁

資料三〇は、空蟬との逢瀬に失敗した光源氏が軽々しい忍び歩きを反省して、小君を連れて二条院に到着した、というものである。

これ以降、小君を責めたり、手紙を書いたりした次の場面が始まっている。到着してからの出来事が続いているので、「おはしぬ」から次の場面とするべきであろう。

資料三一は、句宮の命を受けて、宇治へ出発した時方が、たやすく到着したとなる例である。この場合も、宇治に時方が着いてからの出来事が「行き着きぬ」以降続いている。一度、「行く」と出発したことが記されるので、ここで一つの場面が終わっていると考えられるのである。

鈴木氏は、移動動詞の「つ」「ぬ」の場合、「リ」形と比較

すると、移動動詞によってはっきりと新たな場面が発する例は少なく、むしろ前の場面とつながっている考えられる例がしばしばある(8)とされる。しかし、その他の動詞に場面起こしの例があることからすると、移動動詞にも認めることができると考えられる。以上のことからすると、源氏物語中では、助動詞「ぬ」も場面起こしに使われていることになる。源氏物語全体では、七〇例ほど場面起こしと考えられる例があり、地の文文末の一〇%以上を占める。場面閉じとともに、地の文における助動詞「ぬ」の機能として認めることができる。

さらに、場面起こしと場面閉じとが同時に「ぬ」で表されていると理解できる例がある。

〔資料三二〕打鞠楽、落蹲など遊びて、勝負の乱声どものしるも、夜に入りはてて、何ごとも見えすなりはてぬ。舍人どもの禄品々賜る。いたく更けて、人々みなあかれたまひぬ。大臣はこなたに大殿籠りぬ。物語など聞こえたまひて……(「螢」八―三頁)

〔資料三三〕殿つゐるたまひて、「まかではべりぬべし。例の御邪気の久しくおこらせたまはざりつるを、恐ろしきわざなりや。山の座主ただ今請じに遣はさむ」と、いそがしげにて立ちたまひぬ。夜更けて、みな出でたまひぬ。大臣は、宮を先に立てたてまつりたまひて、あまたの御子どもの上達部、君たちをひきつけてあなたに渡りたまひぬ。(「浮舟」二九〇七―二九〇八頁)

資料三二では、六条院東北の町での宴席があつて、人々が退出する。ここで宴席の場面が閉じられる。そして、続いて光源氏がこの

花散里のもとで泊まり、あれこれ話をする場面が始まる。

資料三三では、まず夕霧の大臣が「わたりたまひぬ」とその場を離れる。その後「夜更けて」と少し時間があつて、人々がみな退出するところから、次の場面が始まる。この例でも、場面閉じの「ぬ」と場面起こしの「ぬ」の両方が使われていることになる。

このように、助動詞「ぬ」は場面の開始と終了の両方に関わると考えられる。とすると、場面閉じについてはすでに鈴木氏の述べられているところであるが、場面起こしについては「たり」「り」のそれとも比較して説明される必要がある。

「たり」「り」での場面起こしは、場面の開始という側面を重視してのものと思われる。特に、移動動詞の場合は、「動作主体を物語の中に導入し、新たな場面を始発させる場面切替上の役割をもつようになっている」(9)と鈴木氏がされるように、前の場面に引き続きいて、次の新しい場面を導き出すことに重点があると考えられる。それに対して、「ぬ」での場面起こしは、時間の経過がそこに関わる例が多いことからして、その前の場面が終了し、次は違う場面が始まるという場面の変化に重点があるように思われる。今までと違った変化や進展が次にはあると暗示する場面起こしであろう。

資料三〇の場合、空蟬のいる紀伊の介の屋敷から二条院へと場面が変わり、資料三一では都の勾宮のもとから宇治の浮舟の住む屋敷へと場面が変わる。場面転換としては、かなり大きなものである。時節の経過の例では、これら以上に時間の経過で状況の変化が想定され、先に触れた例でも、資料一〇ではそれ以降に秘密の露頭という重要な局面になり、資料一一では紫上が六条院から二条院に移る

という大きな変化が起こる。

ただ、ここで注意すべきは、助動詞「ぬ」の場面起こしと場面閉じは全く別のものではないということである。場面閉じでは、場面を終了させることで次の新しい局面に結び付けていく。場面起こしでは、場面を開始させることで新しい局面を導き出していく。

移動動詞の場合で考えると、資料四の「帰る」や資料五の「出づ」などでは場面を終了させることが想定され、資料三〇の「おはす（いらっしゃるの意）」や資料三二の「行き着く」などでは場面を開始させることが想定される。その動作が完了することで、動作主体が場面から退場するのか、あるいは場面に登場するのかの違いである。助動詞「ぬ」の機能としては同じものと考えられるが、動詞の違いや文脈上の問題でこれらの違いが出てくるのである。

四 助動詞「ぬ」のテキスト上の意味

ここまで見てきた、助動詞「ぬ」の場面閉じと場面起こしは、助動詞「ぬ」の持つ意味が前提となっていて、その上で、テキストの中でそれがいかに発現しているかということになる。とすると、前提としての「ぬ」自体の持つ意味が内的な要因、テキストの文脈というそれが機能する場面が外的な要因として、それぞれ整理することができる。

今一度、この点を、第二章の資料六・七に挙げた、場面閉じにならない例によって検討してみる。

〔資料六―再掲〕いかにいかにと日々に責められ困じて、さる

べきをり、うかがひつけて、消息しおこしたり。喜びながら、いみじくやつれ忍びておはしぬ。まことにわが心にもいとけしからぬことなれば、気近く、なかなか思ひ乱れることもまさるべきことまでは、思ひもよらず……（「若菜下」一一七六頁）

〔資料七―再掲〕例ならぬことにて、御前近くもえまいらぬつましさに、長押にもえのぼらず。「なほ持て来や。所に從ひてこそ」とて、召し寄せて見たまへば、ただこの枕上に夢に見えつる容貌したる女、面影に見えてふと消え失せぬ。昔物語などにこそかかることは聞け、とめづからにむくつけけれど……

（「夕顔」一二四頁）

資料六では、柏木が六条院に「おはしぬ」とやって来る。この主要人物の移動によって、次に六条院の様子描写や出来事が続く、新しい場面が始まり、ここで場面閉じがなされたことになる。しかし、実際のテキストでは柏木の心理描写が続いている。

また、これを場面起こしの例と理解しようとしても、その直前には柏木の六条院案内の要求に困惑する小侍従から漸く手紙が届いたとあり、この「おはしぬ」を場面起こしと見るには無理がある。資料三〇・三一に挙げた、移動動詞の場面起こしの例とは異なっているのである。

資料七でも、某の院で怪異に会って夕顔が息もしないという状況の中、灯りにふと姿を見せて夢に見た女性が消え失せたところからの、次に新しい場面が始まるのではない。夜が明けて惟光が来るまで光源氏は何も出来ないという場面が続いている。連続している部分でもあり、場面起こしの例としても理解できない。

以上二例を見たのであるが、特に、資料六のような移動動詞の場合には、主要人物の移動であるだけに、何らかの場面の転換に密接に関わる可能性が高いはずであるが、全ての例において場面起こしや場面閉じにはならないわけである。それは、やはり外的要因としてのテキストの文脈によるということになる。助動詞「ぬ」の文末用法の存在だけでは十分条件を満たしているに過ぎず、しかるべき使われ方をした場合に必要な条件を満たして、場面の転換に関わる機能を有するのである。

この点を考えるにあたっては、金水敏氏の現代語の「た」のムード性についての考え方が示唆的なものとなる⁽¹⁰⁾。

ここで強調しておきたいのは、ムードの「タ」の意味を生み出しているのは決して「タ」そのものではない、ということである。この場合、「タ」は単に過去時制を表現しているに過ぎない。⁽¹¹⁾

金水氏が強調されているように、「た」のムード性は「た」そのものの意味ではない。ここで挙げられた「期待の実現」「想起」「事後の評価」のそれぞれの例にしても、何らかの文脈の中でムード性が発現すると理解すべきであろう。

たとえば、「事後の評価」の例として挙げられている、「あれは二銀でした」にしても、将棋の対局があって、その感想戦等の中でそのように指すべき手であったという文脈の中でこそ「事後の評価」の意味が現れると考えられる。「名人のあそこで指した手は何でしたか」「あれは二銀でした」のような場合、「事後の評価」の意味は出てこないと思われる。

テンス・アスペクトを示す助動詞の意味を、広義のムード性を保持するものとする考え方もあるが、その点については、

例えば、尾上(1983)⁽¹²⁾は、タ形の意味全体を「広義完了」と捉えた上で、その対象的側面が「完了」「過去」というテンス・アスペクトの意味として把握され、その作用的側面が「確認」「回想」というムードの意味として把握されるのだと述べている。

とした上で、

尾上の、テンス・アスペクトとムードの関係を有機的に捉えようとする立場は習うべきであるが、各用法の意味が実現するための条件が明かでなく、また言語差がどのように現れるかという点についても関心が払われていない。そもそも、テンスとムードが近い関係にあることはどの言語にも共通した自明の事実である。欧州諸語における叙法と時制の関係を見てもそれは察せられるであろう。問題は、各言語においてテンスの性質とムードの性質の分布がどのように異なるかという点、あるいは個別言語においてテンスがムードにつながって行くための具体的な条件にあると考える。⁽¹³⁾

とまとめられている。古代語のテンス・アスペクトの助動詞を考えるにあたっては、ムードとの関わりを見る上で重要な視点である。ただ、助動詞「ぬ」のムード性については、推量の助動詞とともに用いられた「なむ」「ぬべし」のような例、仮定条件での「なば」のような例については「確述」とも言われるムード性の存在が理解しやすいものの、典型的な文末用法の理解においては必ずしもムード

性の存在を必要としない。

その中で、助動詞「つ」のムード性については、糸井通浩氏の指摘がある(13)。糸井氏は、平安朝の日記作品の分析をされた上で、和泉式部日記の「つ」の用例について、

主体の動作「きこえさす」の、非実現の状態から実現した状態へという事態の変化を見つめている視線が感じられる。動作実現の現場に寄り添っているという視点があると思われるのである。そこに動作主体の動作実現に対する意志性が表出されているとも感じられ、一種のムード的用法だと言えるだろう。(14)

と、「(歌)」ときこえさせつ」の例では、動作主体の歌をやる意志性があり、それがムード性に通じるとされる。ただ、この理解が可能なのは、糸井氏が和泉式部日記を自作説で検討されているからであり、物語作品の地の文とは違ったものとすべきであろう。

とすると、典型的なムード性を持つテンス・アスペクトに関わる助動詞として、共通理解のあるのは「けり」ということになる。いわゆる「詠嘆」や「気づき」とされるのがその代表的なものである。ただ、それが物語地の文の語りとのようにつながっていくかは今後の検討課題として残されている(15)。

助動詞「ぬ」の物語地の文末用法でも、場面転換に関わる例をどう位置付けるかが大きな課題となる。一つの方向としては、語りの文脈自体を広義のムード性として捉えることがある(16)。また、一つの方向としては、語りの文脈を、ムード性と切り離して、テキスト上の語りの機能として独立的にとらえることもありうる。もっとも、対話という文脈の中での意味、語りという文脈の中で発現す

る意味という点からすると、前者の理解がより包括的とも言えよう。工藤真由美氏の説かれる、「ダイクシス」と「タクシス」(17)に対応するとも考えられるが、物語の語りを考えるにあたっては、テンス・アスペクトの助動詞だけでなく、ムード性との関連の深い推量系の助動詞、さらには「かし」等の終助詞も含めた検討が不可欠である。とすると、草子地の問題も視野に入れる必要がある。

鈴木氏が、地の文のテンス・アスペクトの助動詞について、「即時的な継起的関係に介入し、広い意味で、テキストの分割化と構造化に働いている」と総括することができ(18)と言われるように、基本的な方向は、ほぼ固まっているであろう。現在の課題は、その発現条件の記述と、語りと助動詞の意味・機能との関連の整理にあると思われるのである。

おわりに

本稿では、源氏物語の地の文での文末用法の助動詞「ぬ」の語り起こしと語り閉じの機能について検討した。前者については、鈴木泰氏の指摘をさらに広げて考えたものである。

ただ、物語の語りにおける助動詞の機能とムード性との関連については、検討不十分の点が多い(19)。助動詞自体の意味ではなく、文脈の中で発現するものとすると、やはり共通するものがあると思われる。「ぬ」のムード性と語りとの関連、さらには他の助動詞や終助詞の問題などが、今後の検討課題である。

注

- (1) 源氏物語の調査は、上田勝代・村上征勝・今西祐一郎・樺島忠夫・藤田真理・上田裕一編『源氏物語語彙用例総索引付属語篇』全五巻（勉誠社。平成八年二月）による。
- (2) この点についての検討は別稿を準備している。
- (3) 鈴木泰『改訂版 古代日本語動詞のテンスとアスペクト―源氏物語の分析―』（ひつじ書房。平成二年七月）。
- (4) 注3著書の二二一―二二二頁。
- (5) 西田隆政『源語須磨の表現構成―助動詞「ぬ」による段落構成―』（『中古文学』第五号。平成五年五月）。
- (6) 以下、源氏物語の引用は、『源氏物語大成』校異篇全三巻（中央公論社。昭和二八年六月。調査は第九版（昭和五五年一月）による。適宜、濁点を付し、句読を施し、漢字を当て、仮名遣い・送り仮名を改めた。
- (7) 注3著書の一五八頁。
- (8) 注3著書の二五六頁。
- (9) 注7に同じ。
- (10) 金水敏『いわゆる・ムードの「た」について―状態性との関連から―』（『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院。平成一〇年二月）。
- (11) 注10論文の一六〇頁。
- (12) 尾上圭介『現代語のテンスとアスペクト』（『日本語学』第一巻第二号。昭和五七年十二月）。
- (13) 注10論文の一六九頁。
- (14) 糸井通浩『王朝女流日記の表現機構―その視点と過去・完了の助動詞―』（『国語と国文学』第六四巻第一号。昭和六二年一月）。
- (15) 注14論文の二四頁。
- (16) 鈴木泰『上代語の「けり」の意味』（川端善明・仁田義雄編『日本語文法 体系と方法』（ひつじ書房。平成九年一〇月）では、「上代語のケリが、話手にとつての新たな認識の成立を表すという気づきの意味から発し、evidentialな意味を持つことによつて、証拠に基づいて何かに思い至ること、および何かを再認識することを表す意味に分化発展し、最後に語りであることの指標となる用法（本稿の〈言及〉）においてその両者が統一されていることを明らかにしようとするものである」（二七一頁）のように、方向付けされている。
- (17) 阪倉篤義『竹取物語における「文体」の問題』（『国語国文』第二五巻第一号。昭和三一年一月）は、気づきの「けり」を、発見された事柄を報告する際に解説を加える表現に重なるとしている。この考え方に通じると思われる。
- (18) 工藤真由美『アスペクト・テンス体系とテキスト』（ひつじ書房。平成七年一月）。
- (19) 注3著書の三五四頁。
- (20) 大木一夫『古代語「けり」の意味機能とテキストの型―語句の意味とテキストの関わりをめぐって―』（佐藤喜代治編『国語論究第7集 中古語の研究』明治書院。平成一〇年十二月）は、この点について研究の現状が整理されている。

(後記)

本稿は、平成一一年八月の平成一一年度筑紫国語学談話会夏期合宿において、口頭発表した際の草稿の一部分を修正加筆して成稿したものである。席上、また発表後、ご教示賜った方々に、厚く御礼申し上げる。

— 大分大学助教授 —

火中出生条に見える「国神之子」

—— 古事記を中心に ——

について